

# 学習意欲を高める図書館サービス

米澤 誠

## 1 教育の中心で機能する図書館

大学図書館が大学の授業の中で、今まで以上に活用される可能性は高いと考えている。その可能性を探るグッド・プラクティスとして、図書館を活用した教育活動を展開している中央大学附属高校（以下「中大附属高」という）の事例を、まず紹介したい。

中大附属高（東京都小金井市）では、図書館を特殊教室の一つとして位置づけている。図書館内の閲覧机や検索専用机に、50 台あまりの端末を設置している。机を教室型に配置したスペースには、プレゼンテーション用の機器があり、ここで発表形式の授業も可能となっている。



図 1 PC を配した閲覧机



図 2 プレゼン・スペース

この設備環境のもと、各教科で調べ学習型の授業を行っている。調べ学習では、図書や雑誌などの従来の印刷体の図書館コレクションのみならず、オンライン百科事典やオンライン新聞をフルに活用することができる。このような図書館での授業を、1 日 3～4 クラスが行っているという。

図書館や目録の使い方、データベースの使い方といった、いわゆる情報リテラシー教育を行うのは、専任の司書教諭である。そして、各教科の調べ学習での図書館活用は、教科担当の指導となっている。1 年～2 年生の間で図書館の使い方・情報の探し方を習得することで、3 年生には 8 千文字の本格的なレポート作成までできるようになるという。各教科の学習の過程で、図書館コレクションの活用法を徹底的に学ぶことになるのである。

中大附属高の図書館は教育の中心で機能し、図書館の存在が高校教育の基盤となっている。その基盤を構成するのは、「場としての図書館」と電子的資料を含めた「図書館コレクション」と「情報リテラシー教育」なのである。これらの構成要素は、これからの大学図書館のあり方を考える上でも、基本的かつ重要なファクターとなってきている。

## 2 自学自習の場としての図書館

自学自習の場としての図書館の存在意義は、今も変わりなくある。しかし、図書館コレクションが従来の印刷体から、電子ジャーナルやオンライン百科事典、データベースとい

った電子的資料にまで広がりを見せている現在、図書館内の施設・設備もおのずと変化する必要がある。

ウェブの情報世界が急速に進展してきた 1990 年代から、欧米ではインフォメーション・コモンズもしくはラーニング・コモンズという呼び名の設備を、図書館内に設置するようになってきた。「コモンズ」とは共有の資源・公有の場であり、学習のための共有資源、紙媒体も電子媒体も提供する公有の場といった意味のものなのである。

これらのコモンズはまた、ネット世代の学生の学習・生活行動様式にフィットした空間でなくてはならない。具体的には、次のような機能をもつことになる。

- ・図書館が有する各種情報資源を活用し、長時間リラックスして学習ができる
- ・個人的なスペースの他、グループ学習できるスペースがあり、プレゼンも可能である
- ・レファレンスサービスや各種講習会などの情報リテラシー支援を受けることができる
- ・スキャナー、プリンタ、マルチメディア編集などの設備が利用可能である
- ・コンピュータ設備についての技術的支援を受けることができる

わが国においても、国際基督教大学や横浜国立大学などで同様の施設・設備を設けており、多くの学生を集客する学習の場となっている。

このインフォメーション・コモンズもしくはラーニング・コモンズは、施設・設備の整備だけで機能するものではない。そこで利用できるさまざまな媒体の図書館コレクションを取りそろえるとともに、それらのコレクションを十分に活用できるような情報リテラシー教育を行う必要がある。中大附属高の図書館がそのようなラーニング・コモンズとして活きているのは、情報リテラシーを身につけた学生が、その施設・設備を利用して、学習用として用意された図書館コレクションを有効活用できているからなのである。

### 3 適切な学習用コレクションの構築と提供

#### (1) 学習用コレクションの構築

現在多くの大学図書館では、授業シラバスに掲載された教科書・参考書を収集・提供するというサービスを行っている。各授業のシラバス公開が通常となったことで、図書館での組織的収集が比較的容易になった。これからは、特に大規模履修科目における部数不足の問題解決、関連する資料までの幅広い収集などが課題となってくるであろう。

その面では、今までより一層シラバス内容を意識した、学習用コレクションの組織的収集体制をとる必要がある。例えば同志社大学では、定期的に図書館内の各部署のメンバーで、図書現物を見ながらの選定作業を行っている。このように共同して選定作業を行うことにより、資料に対する見識が相互に高まるという効果もある。

シラバスを活用した収集事例としては、東北大学のウェブ版電子図書の事例がある。東北大学では、工学部のシラバスを綿密に分析することにより、学部高学年から大学院のレベルで活用できる英語の電子図書を選定した。工学高等教育では、工学分野そのものよりも、共通的な基礎科学である数学・物理学・化学分野の英文教材が有効と判断し、それらの分野の中から教育プログラム（開講科目）の主題内容に対応したタイトルを導入したのである。特定タイトルを長期間専有することがないため、大規模履修科目における部数不足問題に対する一つの解決策として有望である。

## (2) 学習用コレクションの提供

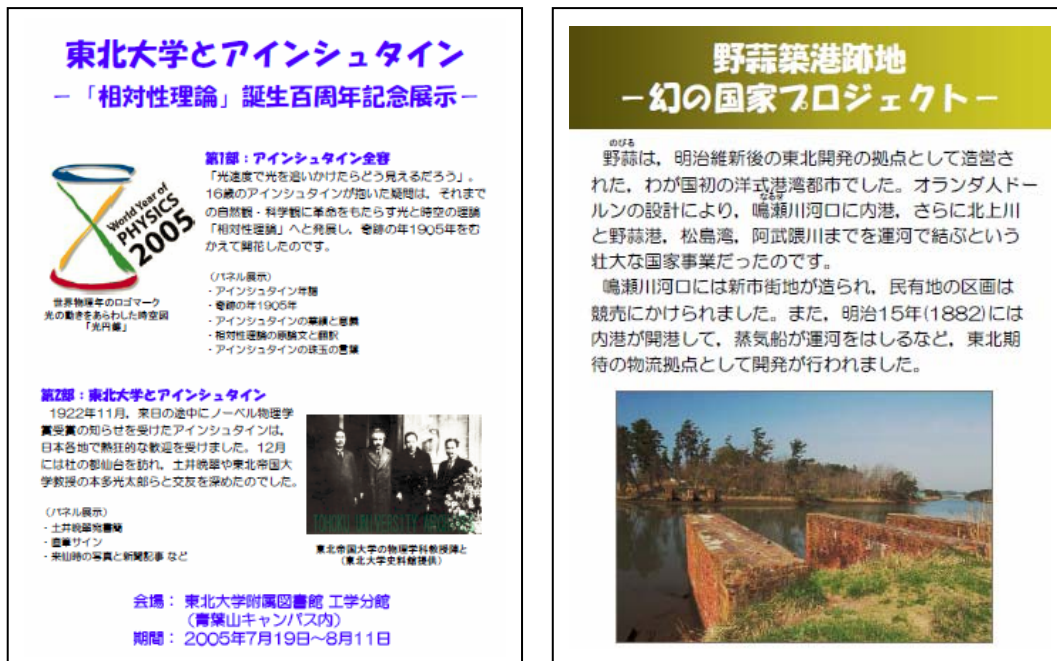
学習用コレクションを有効に提供するには、学生が利用するウェブのシラバス閲覧システム・科目履修システムと、図書館の蔵書検索システムを連動させる必要がある。このシラバス連携の蔵書検索システムは、既に多くの大学が何らかの形で実現しているところである。

今後はさらに、より学生の学習行動に密着した教材提供を実現する必要がある。それぞれの大学の学生が、日常的な学習行動で最もよく通過するウェブコンテンツを見極め、そのウェブコンテンツとリンクした学習用コレクションの情報を提供するのである。

仮想的学習環境（VLE：Virtual Learning Environment）といわれるオンライン学習コースの形成支援システムに、電子的な図書館コレクションを組み込んでいくことも有効である。場としての図書館と同様に、電子的な世界においても学生の学習に役立つコンテンツを提供することが、図書館にもとめられている。

また、展示会などを通じ、図書館コレクションの魅力と有益さを提示することも重要である。古典籍などの貴重コレクションがなくとも、展示会を行うことは可能である。学生にとって魅力あるテーマとすることで、学生の学習意欲や興味を引き出すことができればよいのである。

例えば、筆者が東北大学附属図書館工学分館に在職していたときには、「江戸のエコライフ」、「理系の漱石」、「寺田寅彦と防災科学」、「シビルエンジニアとしての和算家」、「みやぎの土木遺産」、「東北大学とアインシュタイン」、「2035年の科学技術」などのパネル展示を実施した。理工系学生の興味を高めることができたと考えている。



展示会のパネル例

## 4 レポート作成を中心とした情報リテラシー教育

検索エンジンやウェブ情報による情報収集が主流となっている現在、大学での情報リテラシー教育は、学生の立場に立ったやり方をする必要がある。蔵書検索講習会に代表され

る、図書館コレクションの検索方法を中心としたリテラシー教育だけでは、学生の意欲を高め、興味を引くことはできない。

筆者は、レポート作成を入り口とした講習会「理工系学生のための講習会：上手なレポートの作り方・上手な文献の探し方」を実践した経験がある。まず、学生がもっとも必要としているレポート作成術を導入とし、上手なレポートを作成するための情報探索の重要性を説く。それに次いで探索の手法を説明することで、効果的な情報リテラシー教育とすることができた。

このようなレポート作成を中心とした指導方法は、いくつかの大学の基礎教育でも採用している。大阪市立大学では、レポート作成法を教授内容とした小規模クラスのセミナーを、2004年度から実施している。この授業では、レポート作成のための図書館コレクション活用法を教授し、学生の学習能力を高めている。情報探索法の講義と実習は、同大学の学術情報センターで図書館員が行っている。

同様に国際基督教大学では、英語のリーディングとライティングを習得させるための英語教育課程の中で、全クラスに対して図書館コレクションの探し方を教授している。情報探索のインストラクションは、図書館の中で図書館員が行っている。

大学生の教育の中で、基礎的なライティングスキルを身につけさせる授業は今後必須となるであろう。ライティングスキルや情報探索スキルについて、組織的・体系的に構築した教育プログラムは、生涯学習的な観点からも重要なものである。この教育プログラムの企画・実施において、大学図書館が果たすべき役割は大きいものと考えている。

以上、場としての図書館、学習用図書館コレクション、情報リテラシー教育という3つの視点から、学習意欲を高める図書館サービスについて論じた。さらに興味のある方は、下記の文献をお読みいただきたい。

- 一) 米澤誠. インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援. カレントアウェアネス、289、pp.9-12、2006（オンライン）<http://www.dap.ndl.go.jp/ca/modules/ca/>
- 二) 米澤誠. レポート作成を起点とした情報リテラシー教育の試み. 医学図書館、54(2)、2007（掲載予定）
- 三) 米澤誠. e ラーニングでのレポート作成授業の実践と成果評価. 東北大学高等教育開発推進センター紀要、2、pp.237-243、2007（オンライン）[http://www2.he.tohoku.ac.jp/center/koho/koho\\_kiyou.htm](http://www2.he.tohoku.ac.jp/center/koho/koho_kiyou.htm)

注）本稿は、文部科学省・先導的大学改革推進委託事業「今後の『大学像』の在り方に関する調査研究（図書館）」（研究代表：筑波大学，永田治樹教授）などの成果によるものである。